

## 制度経済学のフロンティア\* 理論・応用・政策



須田 文明

本書がすでに当研究所の複数の研究員による希望図書として、当所図書館に配置されていることから考えても、制度への関心が農業経済学者の間でも広く共有されているといえよう。本書を取り上げたのは、農業経済研究を進める上で、制度分析に資するような分析枠組みをいかに構築するかについて、示唆を得ようと考えたからである。

さて、本書は、第1部制度経済学の理論、第2部制度経済学の応用、第3部制度経済学と政策分析からなる。第1部では、ヴェブレンやコモンズといった制度経済学の創始者から、取引費用理論（ウィリアムソン）を経て、さらには進化ゲーム理論（青木昌彦）といった論者の議論が手際よくまとめられている。特に第4章「企業への制度論アプローチ」は、進化経済学への格好の入門をなしていると同時に、塩沢由典氏から着想を得た「制度論的ミクロ・マクロ・ループ」の彫琢が提示される。第2部はこの「ループ」の道具立てを持って、社会経済システムの制度分析が展開される（第5章）。また著者は海老塚・植村両氏との好著『社会経済システムの制度分析』（名古屋大学出版）で展開された、もう一つ概念「市場 企業ネクサス」を簡潔に再論してくれている。労働市場と企業組織、それに企業間関係を加えた三つの要素間での構造的両立性を分析の核として、「ネクサス」を提示しているのである。第3部は、現代日本の労

働市場および雇用システムの分析から、またアメリカやオランダ、スウェーデンの当該分野の分析をふまえて、政策的示唆を与えてくれる。

本書を読んだ後での最初の印象は、簡潔にして要点を的確にとらえた、制度経済学の総覧を本書が提示してくれていることである。学説史や経済理論そのものを専門としない者にとっても、非常に有益な書物であることは明らかである。また著者が提示している「ループ」と「ネクサス」という分析道具は我々の研究にとっても示唆するところが大きい。このことを確認した上で、著者からのメッセージを受け取った農業研究者にとっての課題について指摘しておきたい。一つは、国際レ짐ームについてである。我々は近年、特に顕著になった米欧間の紛争（たとえばGMOをめぐるWTOパネルなど）に敏感なのだが、こうした論点を考察する上での示唆は本書には見られなかった。たとえばレギュレーション学派では、B.コリアが知的財産権をテーマに、この国際的側面の研究に着手しており、我々はこうした研究も取り入れる必要がある。もう一つは、市場 企業ネクサスの地理空間的次元についてである。この「ネクサス」の一つを占める労働市場は正しくも分断的階層的な市場として捉えられているが、我々はこの「ネクサス」に地理空間的な次元を与えることが課題となろう。現在、公共投資の削減にともない地方経済は青息吐息の状態であり、他方で労働市場から排除された若者たちが巷にあふれている。たとえば地方の建設企業が、環境サービス事業や農業的活動に参入するために、または「ニート」と呼ばれる青年たちの就農を促進するために、どのような制度設計が求められるのか、本書から得られた分析手法をさらに鍛え上げることで、考察してみたいと思う。

\* 磯谷明德，『制度経済学のフロンティア：理論・応用・政策』，ミネルヴァ書房，2004年